

たかほこじま
長崎市高鉾島遺跡の再検討

古門 雅高

はじめに

同人会の渡邊康行氏の教示により、長崎港の入口に位置する高鉾島遺跡から小児骨と小形の鉢形土器が出土していることを知った。長崎市内の弥生時代や古墳時代の様相は『新長崎市史』などに整理されているが（長崎市史編さん委編 2013）、資料的な制約から遺跡解説が主体で、一部を除いて歴史的な位置づけや歴史的評価までには及んでいない。

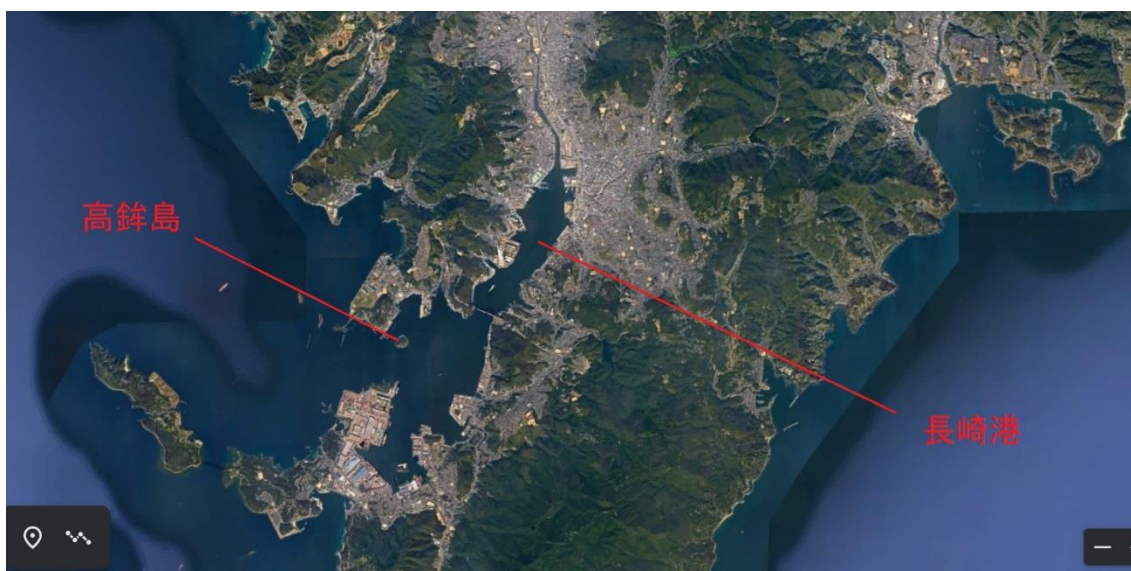
本稿では小児骨に共伴した土器の時期を再検討し、当時の本県本土部の歴史的な社会状況を踏まえつつ本遺跡の復元を試みた。

1 高鉾島遺跡の概要

同遺跡の発見の顛末や概要については昭和 36（1961）年 11 月 11 日付長崎新聞夕刊（第 5 図）とこの記事に基づいた永松実氏の報告がある（永松 1992）。それによると遺跡は不時発見で、墳墓の詳細は不明ながら小児骨と土器が出土している。



第 1 図 高鉾島遺跡の位置



第 2 図 高鉾島遺跡の位置 2（グーグルアースより）

2 出土土器の再検討

出土土器（第3図、写真1）の時期は、永松報告では「弥生時代終末から古墳時代初頭」とされている（永松前掲p. 87）。近年の編年観によれば外来系の鉢形土器で、雲仙市の龍王遺跡12区SB1、同31区SB01で同形式の土器が出土している。拙文の第5図のNo30、40がそれである（古門2022）。

いずれも器高7㍍前後で高鉢島のものとほぼ同じ大きさである（註1）。ただし、

龍王遺跡出土土器と比較した場合、器高に占める口縁部の高さが小さいこと、龍王遺跡出土土器の口縁部が内湾気味なのに対して高鉢島遺跡出土の土器は「く」字状に外傾する口縁であることなどから高鉢島遺跡出土土器が龍王遺跡出土土器より1段階古い型式と判断した（註2）。

筆者が設定した時期区分の古墳時代第I期に該当し（第4図）、布留0式に併行すると思われる。実年代では3世紀中頃と言えよう。

筆者が作成した本県本土部の古墳時代前期から中期の古墳編年図（第4図）に示したように、第I期は本県で最も古い前方後円墳である守山大塚古墳が築造される前段階の時期にあたり、同時期の遺跡としては大村市冷泉遺跡や同市竹松古墳がある。倭王権ないし倭王権と連合関係にあった筑後あるいは肥後の有力者がタカク（律令時代の高来郡に相当する地域）に進出したか、タカクの有力者が前述の政治勢力を後ろ盾として勢力を伸ばす直前の頃である。

3 高鉢島遺跡の歴史的評価

長崎大学医学部の分析によると人骨は12歳前後のようだが、埋葬施設が単独墳なのか共同墓地であるかの詳細は不明である。筆者が想定した当地域（筆者は「スカ」と仮称している）の古墳時代初頭の社会状況からみて、単独墳は考えられず、本県本土部の墳墓の在り方から見て有力集団が弥生的な共同墓地を営み、その中に首長も埋葬されている状況と推測する（古門2020）この小児は有力集団の一員であるが仮に首長とすれば、当地の部族の首長の例からして女子が想像できる。このことは『肥前国風土記』に記載された本県本土部の土蜘蛛すなわち倭王権と親和的ないし対立的な在地勢力の長はいずれも女性であったことから類推している。さらに想像をたくましくすれば、長崎港入口に葬られた状況からして、この小児が属す有力集団の共同墓地は、敵対勢力から部族を守るために営まれたのかもしれない。この時から半世紀以上経過した時期にタカク地域に守山大塚古墳が築造され、両地域に極めて強い政治的緊張関係が生じたと推定する。

当該地域は次の5世紀には倭王権ないしその連合勢力に協力し、朝鮮半島への軍事進出の水先案内を務めたと想定されており（宇野2013、宮崎2019）、本資料はそれに先立つ倭王権の地方進出と対峙する地方勢力の具体的な様相を示す貴重な考古資料のひとつと評価できる。（註3）

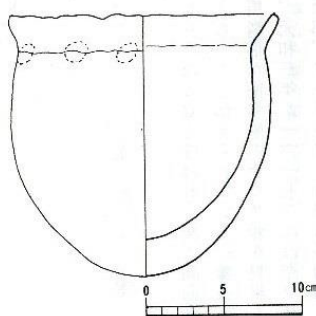
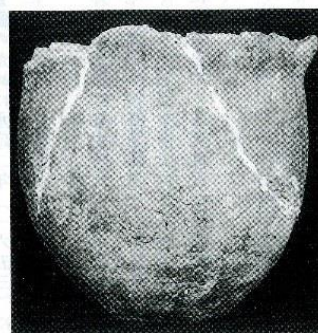


図2 小形鉢実測



小形鉢

第3図 高鉢島遺跡出土土器（永松1992より）

スケール数値10cmは5cmの誤りか。S=1/2.5?（筆者註）。

前方後円墳 集落群	地域・墳形 /年代	土器様式	チカ		スカ		ヒラ		マツラ		ソノキ		タカク	
			前方後円墳	その他	前方後円墳	その他	前方後円墳	その他	前方後円墳	その他	前方後円墳	その他	前方後円墳	その他
1期	250	第I期				高神古遺跡	田形古墳					冷泉2,3,4号墳 冷泉1,5,6号墳 竹佐古墳	中江遺跡3,4号有力集団墓	その他
2期	300	第II期											小佐古石積有力集団墓	丸塚古墳
3期		第III期												
4期		第IV期												
5期	400	第V期												
6期		第V期												
7期		第V期												
8期	500	第VI期												



【注1】 前方後円墳集落群の年代は本図2003、重箱2018、社田2019を参考にし、本稿の土器様式の年代はあくまでも参考である。

【注2】 前方後円墳の集落群は重箱2012、秀島2017、吉岡2019を参考にし、

【注3】 同集落内の墳墓の集落群は必ずしも時期差を反映してはいない。

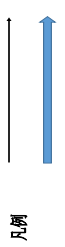
【注4】 「墳墓名 (V番号)」の () 内は調査年度集落群番号である。

【注5】 欄外の墳墓は時期決定の根拠に欠けるものである。

【注6】 本図は初期の前半と後半を分かつ指標となるので、集落内に記載した。

第4図 本県本土部の古墳その他編年図

共同基址の継続期間
この間のある時点で出現



凡例

本稿は草稿の時点で宮崎貴夫氏から批評をいただき、高銚島遺跡出土土器については長崎市文化財課の宮下雅史氏より情報をいただいた。末筆ながら芳名を記し感謝申し上げたい。

(令和4年6月13日脱稿)

【註】

- 註1 当該土器は長崎新聞夕刊によると高さ10㍑、直径7㍑と記載されているが、永松報告では器高、直径ともに5㍑と記載されている。同土器は現在長崎市文化財課の松ヶ枝整理室に保管されており、同課の宮下課長補佐によると器高は8～8.5㍑ということであった(写真1)。したがって長崎新聞夕刊や永松報告の土器の記述は正確さに欠けると言わざるを得ない。
- 註2 筆者は当初この土器を龍王遺跡12区SB1や同31区SB01出土土器と同時期と見ていたが、宮崎貴夫氏より「短い口縁で尖底の甕形に近い形状をもっているようにも見えますので、龍王12区SB1の鉢よりもう一段階古くなるのではないかと(布留0式段階か、あるいは弥生終末・庄内式併行)というイメージをもちます。」という教示をいただき、再考に至った。
- 註3 宮崎貴夫氏からは「高銚島遺跡の歴史的评价につきましても、長崎港の湾口にあつて近世には台場も築かれたという場所ですから、長崎港に入っていく目印(ランドマーク)となる場所であつて、長崎港湾を往き来する海民・海人たちにとって、その島が象徴的な場所であつたことは想像されてきます。しかし、埋葬された小児を部族の首長の一族であつたということは難しいのではないのでしょうか。福岡県で囑託をしていた時に、春日市門田遺跡門田地区で中期前半の甕棺列葬墓が検出されて、1基の成人用の合口甕棺墓から貝輪が出土しましたが、須玖I式の煮炊き用甕を合口にした小児甕棺墓が周辺から出土しました。その小児甕棺を取り上げたところ、墓壇に小さなピットがあつてそこに小さな貝輪が一つ入っていました。そこで、小児甕棺の被葬者は貝輪が出土した成人甕棺の被葬者と血のつながりがあつて、この子は将来シャーマンになることが囑望されていたのだろうと、調査員同志で話をしたことがありました。その事例に比較しますと、高銚島遺跡の小児は部族の首長の一族(女子)であると推定する資料的根拠が乏しいのではないかと思います。そこで、「倭王権の地方進出と対峙する地方勢力の具体的な様相を示す貴重な考古資料のひとつ」と評価することは難しいと考えます。考古学にとって、考古学的想像力を働かせて仮説を立てていくことは大事であると思っております。そのためには、裏付け・根拠となる資料が必要になります。高銚島遺跡の資料には、それだけの材料・証拠が揃っていないように思います。」との批評をお手紙でいただいた。

宮崎氏の批評は考古学の方法論として正当なものであり、傾聴に値する。しかし本県のように北部九州に比べて威信財や副葬品の出土も稀で物証が乏しい地域では歴史的评价をどのようにくたしていけばよいのか、このことは筆者が長年悩み、もどかしさを感じてきた問題である。その中で出した結論は、想像力を働かせた仮説が妄想と化さないためにも、本県の考古学資料を集成し、分析し、傾向や法則性を抽出するという煩雑で地道な作業を経たうえで評価をくだすというものであつた。当該期の本県本土部の墳墓が有力集団による弥生的な共同墓地の形をとることは既に『西海考古』第12号に掲載した拙文で明らかにしている(古門2022)。この評価に立てば高銚島の墳墓は単独墳ではなく弥生的な共同墓地で、かつ有力者一族の墓とすることは妥当であるし、ソノキ、タカク、マツラなど他地域の動向と合わせて考えると、先のような評価が成り立つと考える。わずかに1点の相伴土器であるが、この土器によって墳墓の時期が判明し、本県本土部の考古資料の網羅的な検討から導いた当該期の本県本土部の墓制の在り方から見て上記のような評価をくだしたのであつて、決して想像力のみで拠つたものではない。



写真1 長崎市高鉾島遺跡出土土器



長崎工高の体育館落成

長崎市野町にある県立長崎工業学校の体育館Ⅱ号Ⅰの落成は、十二月十日午前同校体育館に、県、市の関係者父兄三百人が集り、祝いのことばを述べた。同校定時制学生会の山口会長と生徒代表の山本武勝君が、こんな挨拶をした。体育館をつくってもらったことばで、お礼を述べ、校歌の斉唱など式を終わった。

完成した体育館は基礎が鉄筋コンクリート造り、高さ六・五メートル、幅十九メートル、奥行二十七メートル、三十八メートルの広さのりっぱなもの。照明は三百ワットの蛍光灯十五個と二千ワットの蛍光灯二十個を備えている。学校柳の負担四百八十二万円を含めて総工費は千四百八十二万円。

高鉾島から古い人骨

長崎 二一四世紀の土器も

長崎藩口の無人塚である高鉾(たかぼ)島から西暦一四世紀と推定される土器と風化した非常に古い人骨の一部が発見された。人骨が種々種に届け、同郷で同教養で調べたところ、この人骨は頭がい骨、上腕骨、下あご骨、肩こぶ骨、肋骨などがあり、年齢は十二、三歳と推定できるが、このものは高鉾島に在りて推定できず、近々九大に再鑑定してもらうことにしている。長次の高野助教はこれまでに数知れぬほど人骨はみえたが、これほど風化している骨は見当たらないので、非常に古いといつては、さるが何千年前のものであるといつては、とほでせぬといっている。

しかし、いまに発掘された土器は高さ十センチ、直径七センチの原始的な赤褐色で、西暦二十四年ごろの祭司に使用した土師(はじ)器と推定されており、人骨の鑑定結果では、無人塚だった高鉾島土器と同じ年代に人が住んでいたという新しい史実が明らかされるものと注目されている。

第5図 長崎新聞夕刊昭和36(1961)年11月11日付け

【引用・参考文献】

- 宇野慎敏 2013 「九州島における4・5世紀の様相(2)ー肥前(2)ー」『つどい』305号 豊中歴史同好会
- 長崎市史編さん委編 2013 『新長崎市史』長崎市史編さん委員会
- 永松 実 1992 「長崎市高鈴島の弥生～古墳小児骨について」『長崎市立博物館報』(32号) 長崎市立博物館
- 古門雅高 2022 「前方後円墳分布周縁地域の社会ー長崎県本土部の古墳時代前期および中期を中心にー」『西海考古』
第12号 西海考古同人会
- 宮崎貴夫 2019 「日本列島最西端の古墳の様相ー長崎県本土地域における古墳の諸問題ー」『長崎地域の考古学研究』
自費出版